

江戸の坂道散策

第3回 目切坂 (目黒区)



山野 勝 Yamano Masaru
坂道研究家

1943年、広島県生まれ。早稲田大学政経学部新聞学科卒業。報知新聞社を経て講談社に入社。「ヤングマガジン」編集長、第3編集局長、取締役、常務取締役を務め、現在講談社顧問。この十数年、東京の坂道を積極的に歩き、エッセイや講演などで坂道ブームの火付け役に。『タモリのTOKYO 坂道美学入門』（講談社）に企画参加。著書に「江戸の坂——東京・歴史散歩ガイド」（朝日新聞社）がある。

目 黒区の上目黒一丁目九と青葉
台一丁目六との間で、代官山

交番の西脇から南へ、そして途中から西へ迂曲して下る急坂がある。名前を目切坂（めきり坂）という。長い石塀にオカメヅタがからまり、北側の屋敷林と歩道に立ち並ぶシイの巨木が坂に枝を伸ばし、こんもりしたトンネルを作っている。新緑のころに歩くと、樹林からの木漏れ日が緑の樹影を投げかけて美しい。

坂名の由来は、この坂上に石臼の目切りをする石工の名人が住んでいたことによる。名工の名は伊藤与右衛門（または与兵衛）といい、鎌倉時代から続く旧家で、明治一〇（一八七七）年ごろまで居住していたという（「目黒区誌」「目黒区大観」）。

また、この坂道は旧鎌倉街道でもあった。旧山手通りのヒルサイドテラスD棟の前庭にある猿楽塚（円墳）から下って、この道に続いていった。

鎧兜の荒武者が「いざ鎌倉へ」と馬を疾駆させていた光景を想像すると、深い感慨に襲われてくる。林の中のうす暗い坂道だったので暗闇坂とも呼ばれていた。

坂が屈折したところに目黒元富士



目切坂

跡の説明板が建っている。江戸時代には富士山への信仰が盛んだった。文化九（一八一二）年、上目黒の富士講の人々によって高さ一二メートルもある富士塚がここに築かれた。山頂には浅間大神を祀る石祠もあり、手軽に富士登山が楽しめたわけだ。その後、文政二（一八一九）年に中目黒二丁目に新しい富士塚が築かれたので、ここは新富士に対して元富士と呼ばれるようになった。明治に取り壊されて今は跡形もない。

屋茶服一

江戸の坂の命名方法にはいろいろあるが、洒落でつけられた坂もある。

永田町二丁目一七と二〇の間の「三べ坂」もその一つ。坂をはさんで、岸和田藩主・岡部家の屋敷（今の日比谷高校一帯）、岡部藩主・安部家の屋敷（今の衆院第二議員会館一帯）、伯太藩主・渡辺家の屋敷（今の参院議員会館一帯）の三屋敷が並んでいた。三家の名字の下を読みが、漢字は異なるが同じ「べ」なので「三べ」と呼んだわけだ。